

4 . プロ・スポーツ論 - プロ・スポーツとスポーツの公共性 -

内海 和雄

はじめに：プロ・スポーツをめぐる問題状況

テレビのニュース番組は「政治・経済・スポーツ・天気予報」という4本柱を中心に構成されている。それだけ、スポーツは国民生活に浸透している。そしてその大半はプロフェッショナルスポーツ（以下プロ・スポーツと略す）をめぐるニュースである。国民のあこがれ、国民への夢と感動を与えるプロ・スポーツは、国民の生活に根付いた割にはその意義の研究は意外と少ない。

本テーマは2003年度夏学期の開講科目として初めて挑戦したものであり、年度末に出版予定であり、本稿ではその目次を中心に、その主旨を報告する。

さて、本稿で究明しようとしていることは、おおよそ以下の点である。

プロの正しい理解のために、プロの発展を3極構造（プロ＝ファン＝自治体）で捉える。その場合、公共機関との関わりをも一つの極として、プロ・スポーツの公共的な側面も重視する。

それと同時に、プロ・スポーツがスポーツ発展に果たす意味、役割を問い直す。その一方で、アマチュアリズムの果たした歴史的プレーキの要素も確認する。

そして最後に、プロ・スポーツ（見るスポーツ）は地域スポーツ（するスポーツ）に支えられ、後者の発展を基盤に進展するという視点を発展させる。その場合、国民の福祉水準の一環としての地域スポーツの進展度合いがプロ・スポーツを支える地盤を形成すると考えられる。もちろん前者が後者の発展に寄与するケースも否定しない。

こうした狙いも含めてプロ・スポーツを社会科学的に把握する基本的な枠組みとして本稿で提起した新しい視点は以下のようである。

- ・プロ・スポーツが現実に果たしている役割の大きさ

- ・プロはアマチュアリズムとの戦いの歴史（アマチュアリズムはスポーツの発展を阻害した）
- ・高度経済成長と高度化・大衆化の進展（アマチュアリズムの2つの側面の崩壊）
- ・日本の高度化とプロ・スポーツの企業依存体質
- ・プロ・スポーツの公共性と市場性
- ・自治体のプロ支援の根拠と地域振興
- ・日本における野球力とサッカー力の比較（3：1）
- ・スポーツの公共性の復権
- ・プレーヤーの権利（直接生産者の権利）
- ・ファン・サポーターの権利（消費者の権利）
- ・「見るスポーツ」と「するスポーツ」の関連
後者による支え：地域スポーツの振興を
- ・プロ・スポーツ成立の基盤は国民の生活水準の高揚

尚、本稿でのプロ・スポーツとはサッカー、野球、ラグビーなどの集団種目を中心とする。

1 . プロ・スポーツ研究の必要性

アマチュアリズムの弊害で、プロ・スポーツを一段低く見る心性が伝統的に染みついて来た。スポーツ文化の正しい理解の上からは克服されなければならない。これはまた、プロ研究へのインセンティブ（動機）を低めてきたと考えられる。

2 . プロ化の必然性

高度化の必然性は、大衆的支持という条件があればプロ化を必然とする。だが、無ければいっそう公共的援助を不可欠としている。それは次の2つの基盤、条件の上にもみ存在することができた。

第1は資本主義経済の中での商品経済の普及と、そうしたプロを多数輩出するだけの国民の経済的條件の形成である。

第2は、そうした市場（観戦者の存在）を前

提として、近代的労使関係で成立する労働者（プレーヤー）と資本家（クラブオーナー）によるリーグの形成である。

ところで、長い間アマチュアリズムの影響によって、「スポーツで金を稼ぐのは卑しい」とか、「プロは本当のスポーツではない」とかのレッテルが貼られてきた。現在の若者にはこうした感覚は存在しない。むしろ彼等にとってプロは「格好いい」「給料がいい」など、憧れの存在である。それも高度経済成長以降のプロ化、大衆化の大きな産物、歴史的必然であるが、ここで、プロの果たしている役割を見ておこう。

3. プロ・スポーツの意義・貢献

文化開発・普及

プロの役割の第1は、高度な技術の開発であり、その普及である。プロである以上、リーグとして多くの練習と試合を行い、その高度さ、華麗さを観客に見せて職業として成立する。その技術はやがて大衆に普及して、広く国民の文化となる。こうした点でプロとは文化の開拓者として大衆化へも寄与し、本来的に公共的な側面を有している存在である。

経済効果・地域活性化

人気のあるプロチーム、プレーヤーのキャラクターグッズはファンにとってかけがいのない存在である。プロチームが勝利すると、そのホームタウンをはじめ、関連企業はバーゲンなどを催し、消費が促進される。また日常的には例えば居酒屋等が繁盛する。経済的効果とはそればかりではない。ホームタウンでは関連土産商品が開発され、地場産業の活性化、雇用促進となる（ことが期待される）。

知名度の上昇

さらには、ホームタウンの知名度の上昇により、企業の転入を期待できるとの声もある。しかし、全国、全世界への知名度を上げたい自治体にとって、プロ球団ないし、国際的なイベントの招致は絶好の機会である。それによって、その後の観光客数の上昇が何よりも期待されることである。

道徳的効果

プロは国民に夢と希望と感動を与える仕事でもある。それ故に、プロは国民のヒーローとして偶像視される。彼等にあこがれて、励まされて物事にがんばる子どもも多い。その分、自己規制を求められる。

住民への地域アイデンティティ

この地域アイデンティティは、道徳的効果とも関連するが、プロ・スポーツ球団が我が町にあることによって、住民の地域アイデンティティが高まり、自信となる。後述するように、Jリーグのホームタウンのほとんどはこの効果を発揮している。ここでは、思想も社会的地位も、老若男女に関わりなく、鼻肩（ひいき）のチームを応援するという一点で繋がり合える効果をも有している。

そして、地域住民のスポーツ参加を促進する。この場合、その自治体のスポーツ振興政策が決定的であるが、プロに刺激されて、自らも参加のきっかけとなる。その意味で「見るスポーツ」が「するスポーツ」を刺激する。

4. 問題点

とはいえ、プロ・スポーツに問題がないわけではなく、多くの問題を抱えているのも事実である。

現代社会では営利主義が引き起こす問題点が主要である。そしてグローバル化したテレビと球団、プレーヤーを巡る問題とそれが引き起こす問題も、未知の問題も多い。その他トップダウンの経営、意志決定における選手、サポーターの排除、選手の人権の低さ等々、今後の章で展開したい。

5. プロ・スポーツの先行研究

これまで、プロ・スポーツへの経済学的接近は多少なされてきている。それらは今後の章で引用し、参考にするが、その場合労働経済学からの接近、つまり主にプレーヤーの労使契約問題等であり、もう一つは産業組織論的な、球団経営に関する問題などである。最近のJリーグ効果なのか、あるいは企業スポーツの崩壊によるのか、プロ・スポーツ球団経営については少しずつ、出版されてきている。しかし、プロ・スポーツ研究として、観客、視聴者（ファン、サポーター）、そして自治体も含めた、3極構造としての把握が必要だと思

う。

第1章 プロ(プロフェッショナル)とは何か

1. スポーツの公共性と私事性 - スポーツの所有史 -

スポーツとは、身体を駆使して技術の優劣を競い競争性を楽しむ文化であるが、そのスポーツ文化の所有論という、社会科学的な視点から見た場合、歴史上いつの時代も、誰でもが、どこでも、行っていたわけではなく、支配階級による占有の歴史であった。そして、資本主義社会ではブルジョアジー(資本家階級)の独占であった。しかしそこに労働者階級が参加しようとしたために、彼等を排除するイデオロギーと方法がアマチュアリズム、アマチュア規定である。(内海和雄『スポーツの公共性と主体形成』不昧堂出版、1989年)

2. アマチュアリズムとは何か - 高度化と大衆化の2つの独占・排除

ここで、アマチュアリズムそれ自体について触れておく必要がある。

最初のアマチュア規定は先述のように1866年の全英陸上競技選手権大会での、「職工、労働者はアマチュアではない」などの極めて露骨な「階級的規定」であった。それと同時に「試合での賞金や商品を目当てにしないこと」などの「経済的規定」が併行した。

そればかりでなく、アマチュアリズムをジェンダーとスポーツ所有論の視点から見ると、それはスポーツから女性を排除し、男性の伝統の保持であった。(Richard Holt and Tony Mason, *Sport in Britain 1945-2000*, lackwell, 2000, p53.)

1930年代頃からは「経済的規定」に代わって、「アマチュアはフェアプレーを尊重する」「アマチュアは紳士の品位を有す」等の「倫理的規定」が強められていった。それだけ、アマチュアリズムの矛盾が深まった徴候でもあった。

日本では、欧米に約50年遅れてスポーツとアマチュアリズムが普及した。

ところで、アマチュアリズムには2つの独占と

それに伴う2つの排除があった。1つは高度化(トップレベル)に伴う独占と排除である。つまり、労働者階級の優秀な選手の参加を排除し、資本家階級にスポーツを独占する側面であり、もう1つはスポーツの一般大衆への普及に必要な公共的援助を押しとどめた、個人主義的側面である。

この、高度化と大衆化の2つの側面は、資本主義という商品化を本質とする社会の中にありながら、スポーツの独占によって、さらにスポーツの商品化を極めて少数者に限定するという内的矛盾を内包することになった。

つまり、プロ化という商品化を抑圧し、さらには労働者階級のスポーツ参加という商品化の条件をつぶしたのである。こうして、アマチュアリズムは、高度化と大衆化という2つの側面で、スポーツの普及を阻害すると同時に、資本主義の本質である商品化という点でも阻害した。そしてこれが、資本主義内でのアマチュアリズムの最大の内的矛盾を形成し、その後のアマチュアスポーツの歴史は、この矛盾との対抗の歴史である。

そして、なぜスポーツだけにアマチュアリズムが生まれたかと言えば、それは肉体労働自体がスポーツのトレーニングを兼ねる要素もあったからであり、他の芸術などは、当初から労働者階級は排除されていたから、アマチュアリズムなどの生まれる必要性すらなかったのである。

3. プロ・スポーツの成立とは何か：専門性の販売と市場の成立

以上の経過から分かるように、プロとは高度な技術(パフォーマンス)を販売して成立する職業である。そのためには次のような一般的な条件の成立が必要である。

第1は、そうしたプロを見て楽しむ、つまり「見るスポーツ」を成立させるための観客の形成が必要である。そのために、先ず一定数以上の人口が集まる都市の形成を前提とする。こうした都市の形成が、プロを成立させる事ができた。そしてそうした都市は、多く産業革命を経て形成された。

第2に、そこに住む圧倒的な人口である労働者階級の生活条件、労働条件の一定の向上が前提で

ある。つまり、産業革命の初期のように、長時間労働、低賃金の状態では、そうした見る文化の醸成は不可能だったからである。したがって、労働運動などの経験した 1880 年代にプロは誕生してきたのである。労働者階級の生活の一定の改善の中で、恒常的に最上のチームの試合を見るための入場料を払える条件の形成である。

第 3 に、そうした多くの労働者の文化要求を満たすだけの高度な技術を形成するプロの存在が必要になった。それと同時に、そうしたプロ化へと興行を組む、興行師たちの役割も大きかった。彼等は地域の資本家が多かったが、次第に全国資本も参入するようになった。

第 4 に、プロは単に工場対抗戦から、次第に都市対抗へと発展した。ここには当時の都市の置かれた条件が決定した。それはまた、イギリスの都市とアメリカの都市の形成過程の相違がプロ・スポーツの形成過程に大きな差異をもたらした。

4. スポーツの生産者(プレイヤー、オーナー)と消費者

プロ・スポーツというと、多くはプレイヤーのみを連想しがちであるが、それではプロ全体を把握していることにはならない。プロが成立するにはプレイヤーと球団オーナーの労使の成立を必要とする。プレイヤーだけではプロは成立しなかった。そしてプレイヤーがいなければオーナーだけでもプロとはなれない。そして当然にして球団の連合体としてのリーグの成立が必須である。つまり、プロとはプレイヤーとオーナーという労使、対立物の統一として弁証法的な存在なのである。そしてここには、既に述べたように、労使間の諸問題が生ずる。そしてリーグ内では球団同士の関連やリーグの経営を巡る球団経営の諸問題が生ずる。

第 2 に、プロは市場の存在を前提として成立する職業であるから、ファン、サポーター、あるいは観戦者、そして視聴者という大衆の存在と、それとの関係での把握が必要となる。

そしてプロと彼等を媒介するのがメディアである。かつては新聞が、そしてその後はラジオが加

わり、そして現在ではテレビが大きな役割を演じている。

プロ球団として観戦者、視聴者の動向には最も神経をとがらせる問題である。多くのファンを獲得するために何をなしたらよいか、球団は常に考えている。

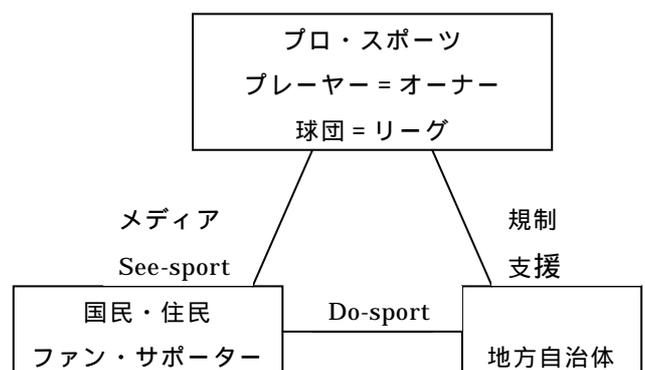
また、日本では Jリーグの誕生をきっかけとしてサポーターという概念も生まれ、観戦者、視聴者の研究も重要になってきた。国際的にも、「ファンの権利を考える」という視点からの研究も現れた。(クレイグ・マクギル『サッカー株式会社』文藝春秋、2002 年 1 月)

従来、プロの把握、研究はこの段階までで終わっていた。しかし、プロの成立を研究しながら明確になってきたことは、多くのプロ・スポーツが自治体の支援の上に成立しており、もしその支援が無くなれば、即刻倒産する状態であるほどに、自治体の果たしている役割が大きい。と同時に、このことはプロ・スポーツの成立過程からも明らかになることである。

そして、そうした自治体の支援の実態と意義を考察するとき、スポーツのアマチュアリズムによる個人主義のくびきから解放されて、プロ・スポーツさえも、今や公共性を主張し始めている実態が見えてきたことである。

以上の関係を図にしたのが図 1 である。ここではプロ・スポーツ把握の 3 極構造が模式化されている。こうした構造の下に、今後展開する。

図 1 プロ・スポーツ把握の 3 極構造



第2章 プロ・スポーツの誕生(i)19世紀

1. 各国のプロの誕生

第1期の背景として、労働者階級の集積としての都市の形成が前提。これはプロの前提である一定数の消費者が必要であるためであり、さらに彼等の生活がスポーツ観戦を可能とさせる若干の経済的改善(労働者階級の生活の改善)を必要とした。

(1) 封建時代のプロ・スポーツ 相撲

ヨーロッパ中世

(2) 資本主義社会とプロ・スポーツの誕生 アマチュアリズムの誕生

プロスポーツの誕生(i)第一期としてのプロ化

(3) 種目によるプロ化段階の違い、プロ＝スポーツ労働者の誕生

特に、イギリスのサッカー、アメリカの野球、そして日本の野球について少し詳しく見てみよう。

サッカー

ブルジョアスポーツ(ゴルフ、ラグビー、テニス、乗馬他)は例外として、労働者階級の多数参加したサッカー、ラグビー(リーグ)のプロ化に、現代のイギリスプロ・スポーツの運営形態の典型が見られる。その誕生と背景は以下の通りである。

イギリスでのサッカーは原始フットボールからイートン校やハロー校などの貴族的パブリックスクールで次第に精練され、1863年にフットボール協会(F A)がルール統一を伴って発足した。1871年には第1回F A cupが開催された。初期のクラブは主として南部のアマチュアクラブを主体とした。そしてそれは68年には30クラブに拡大した。

(Horne, J., Tomlinson, A., Whannel, G.,

Understanding sport-An introduction to the sociological and cultural analysis of sport, E & FN Spon, 1999, p42)

そうした中で、企業家からの企業統合策として、そして地域統合策として工場労働者を中心に、スポーツが奨励され、工場内チームとして栄えた(サ

ッカー、ラグビー)。高度化し、対抗戦も増え、次第にプロ化への衝動を強めた。それと同時にプロを支える「消費者」としての労働者階級の集積、都市の形成を前提とした。この過程で地域の資本家が資金を提供し、組織運営を担った。

だが、この過程で自治体の援助を得ることはなかった。それは、プロは「本当のスポーツではない」と蔑まれたこと、自治体のトップはすべてブルジョアジーによって担われていたためである。また、自治体にとっても、産業革命による反映で、都市の名誉と知名度は確立していたので、都市のアイデンティティを形成する必要はなかった。

1887年にはSheffield Wednesdayがプロ化した。F Aは1888年からプロを組織に編入した。北部の産業革命で急速に都市化した12チームから構成された。

(Horne, J., Tomlinson, A., Whannel, G., *ibid*, p42)

この頃、イートン校などでのサッカーは労働者階級に凌駕され、彼等はラグビーに移行しつつあった。そして、アマチュアサッカーは細々と行われた。こうしてプロが誕生した。ラグビーはアマ(ユニオン)、プロ(リーグ)が断絶した。サッカーも断絶したが、アマサッカーが消滅したため、F Aはプロを中心にアマも包摂した。

1880年代は90年代と比較すれば未だに労働運動は緩やかであったために、労働者階級とブルジョアジーとの階級的和合は可能であった。それが、サッカーでのアマ、プロの両組織を一つのF Aという組織の中で包摂し得た背景である。この点、90年代は労働運動がいっそう高揚し、ラグビーにおける階級融合はもはや不可能となり、ユニオンとリーグというアマとプロの決定的な分裂となった。とはいえ、プレーヤーの給料は高度経済成長までは極めて低いものであった。1890年代のプロ化促進と労働者の階級的一体感が高揚し、見せるスポーツが高揚した。(等々力賢治「サッカーの商品化の歴史 - 19世紀後期イギリスにおける動向を中心に - 」『現代スポーツ評論』6, 創文企画、2002年5月)

このプロセスで、サッカーは地域に根ざしたが、自治体が施設を建設し、クラブに提供することはなかった。これはアマチュアリズムにおける個人主義が災いとなり、公共が援助（介入）すべきではないと考えられて来たからである。ましてや「卑しいプロ」「本当のスポーツでないプロ」に公共の援助を行うことなど、あり得ないことであった。こうした背景が、イギリスにおけるプロは自前で施設をも準備せざるをえなかった理由であった。

ラグビー：ラグビーリーグの誕生

メジャーリーグ野球（MLBの経過）

アメリカは封建制を経ないでいきなり資本主義国として出発した国である。それ故、都市の形成も新しく、また産業化の気運も強かった。

1870年代からのアメリカ諸都市の産業化と労働者階級の集積の中で、「都市の中産階級、スポーツिंगジェントルマン、ハードワーク、未来展望、クリスチャン信仰の人々、彼等は野球を愛し、それは道徳的、人格的な高揚と社会の円滑化に寄与すると考えた。・・・イギリス系、スコットランド系、ドイツ系のスポーツマン、中産階級の自発的な組織の誕生、スポーツ産業の発展、都市間交通網の発達、コミュニケーションネットワークの発達」があった。（Steven A.Riess, *City Games, The evolution of American urban society and the rise of sports*, University of Illinois Press, 1989, p47）

南北戦争（1861～1865年）を契機とする時期は産業資本確立期にあたり、資本主義発展期に相当している。実質的には野球は都市に生じたものであり、1871年から1875年時の全米プロ選手協会に属する選手の84%は、都市（人口2500人以上）の出身者であった。つまり、人口の都市集中は、資本主義発展の必然的結果であり、このことがプロ野球成立の重要な背景であった。またこの時期には、労働時間の短縮による自由時間の増大や一定の生活水準の向上、さらには輸送手段の発達などが実現している。（森川貞夫「プロフェッショナルスポーツ団体」『スポーツ大事典』大修館書店、1987年、p1124）

1858年に野球で初の入場料が徴収された。シンシナティレッドストッキングズは、1869年の新しいシーズンから、史上最初のプロ野球チームとして再出発した。1870年の〈全国野球選手協会〉の場合と同様、〈全国プロ野球選手協会〉も、賭博師のために崩壊した。そのあと、1876年に〈ナショナル・リーグ〉が設立された。これまでのような“選手の協会”ではなく、“球団の連盟”である。・・・この背景に、野球がアメリカでの普及の最初から“見るスポーツ”としての性格を指摘している。（鈴木武樹『アメリカ・プロ野球史 - スポーツ・ビジネスの夢と現実 - 』三一書房、1971年、p30）

「プロ野球の最初の30年（1870～1900）は、大きな規制を伴った時代である。つまり、殆どのメジャー、マイナークラブが都市政治との直接的、間接的な関連をもった。・・・1869年の最初のフルタイムのチーム、シンシナティレッドストッキングズは、ビジネスマンや政治家アーロン・チャンピオン - 彼の目的は彼等のホームタウンを高めるためにスポーツを利用すること - 等の支援を受けて、地域の後援者によって組織された。」

（Steven A.Riess, *ibid*, p195）

「諸政府は、プロ・スポーツと関連産業が活動する上での国家的な法規を制定する。例えば、独占禁止法、放送関係、そして税制である。地方、州、そしてプロビンス政府はスポーツ施設建設について、ホームチームへの他の援助を提供する上での公的な決定を行う。」

（Michael .Danielson, *Home Team--Professional sports and the American metropolis*, Princeton University, 1997, p17）

アメリカとイギリスのスポーツの商業化の程度はこの相違は、多分に、アメリカの社会が「より純粋な」タイプの資本主義を体現してきたという事実を反映している。これはまた、イギリスにおける産業資本主義は貴族・紳士階級による支配という既成体制の枠内で発達したのに対して、アメリカ合衆国ではブルジョアの支配の確立に対する重大な永続的障壁は全く存在しなかったという事

実を反映している。(エリック・ダニング、ケネス・シャド著(大西、大沼訳)『ラグビーとイギリス人』ベースボール・マガジン社、1983年、p321、原著1979年)

N P B (日本プロ野球)

日本に野球が移入され始めた明治初期(5~14年)以降、一高を中心とする武士道的精神、質素儉約精神に結合された野球が普及した。一高時代(明治23~36年頃)である。これは日本版のアマチュアリズムである。しかし、明治38年の早稲田大学の第1回米国遠征を機に、「早稲田系イデオロギー」が拡大して行く。つまり、莫大な遠征費の必要性、アメリカにおけるプロの実情の見聞(プロの水準の高さ、墮落をしていない。企業としての成立)高度化の必要性は職業野球に依存せざるを得ないこと、などから、ゲームの金銭化とゲームの商業化を識別しながらの、入場料徴収へ大きく始動した。つまり、入場料収入は、野球の発展にとって必須な経費であり、それを選手個人に分けるプロとは異なるという論理であり、早慶時代とする。

1921年、日本初のプロ野球チーム(日本運動協会チーム:通称芝浦協会チーム)が結成されたが潰れた。これにより大きな財政的基盤と複数チームによるリーグの必要性を実感した。

その間にも、アマチュアリズムの日本的形態である武士道的精神、質素儉約精神に結合した純粋な金銭拒否派、入場料だけは良しとする派、そしてプロ容認派への分化と相克を経て行った。

一方、日清戦争、日露戦争を経て、国民の経済力の向上と、新聞の報道機関としての位置の相対的向上が、発行部数拡大競争を生み、それと鉄道会社の路線沿線の開拓という必要性から、高まる野球熱が注目され、ついに1936(昭和11)年に、日本職業野球連盟の結成をみた。このとき、新聞社チーム4、鉄道会社チーム3である。これは「上からのプロ化」であり、鉄道会社チームはすべて球場を建設したが、新聞社チームは現在に至るも球場を所有していない。

欧米の地域スポーツクラブや企業内スポーツク

ラブを基盤とするよりも、企業の都合で、「上から」クラブを結成したために、地域に根ざす土壌も弱い。これが日本のプロ野球の根本的体質として沈殿し、現在までも規定している。

ラジオ放送の開始が、1925(大正14)年で、ラジオに野球が取り上げられたことは、野球の普及にとって決定的であり、プロの誕生(1936年)とその後の発展にとって大きな意義を持った。(菊幸一『近代プロ・スポーツ』の歴史社会学-日本プロ野球の成立を中心に-)不昧堂出版、1993年)

菊はアマチュアリズムとの関連でのプロを検討の対象とはしていないが、後半では必要上、その関連を多少論じざるを得なくなっている。それ故、最終部分で、アマとプロの関連の図式を示しているが、両者の関連が単に「金銭化-非金銭化」の関連でしか捉えられておらず、この点での問題性は存在する。が、プロ化の過程は描かれている。

日本のプロ野球はなぜ企業のみによって支えられたのか、地域に根ざさなかったのか(このような問いはこれまで発せられることがなかった。)以下の理由による。

・「見るスポーツ」の前提である都市で、労働者階級の余暇が一定増加した。しかし「するスポーツ」は未だ不十分であった。

・企業(新聞社と鉄道会社)が経営促進のために、当時「見るスポーツ」として人気の出始めていた野球に注目した。特に鉄道会社は球場への乗客を見込んで、沿線の駅近くに球場を自前で建設した。(企業の論理)

・早大OBが中心となり、アメリカ遠征後、野球の高度化のためにはプロ化は不可避だと判断した。(スポーツの内在的論理)

・アマチュアリズムが未だ強く、プロ化に対して公共の援助を受ける状況に無く、企業は独自の努力を要請された。(この時期、アマチュア野球も入場料徴収までは許されるという折衷案にはなっていた。)

・一方、自治体側もプロを地域のキャラクターとは考える条件にはなかった。それ故、プロ野球は大都市を基盤としたが、あまり地域性を有しな

かった。(その後、日本でスポーツと地域性が議論となるのは高校野球である。都市対抗野球はそれほど盛り上がらなかった。)

・こうして、プロはアマチュアとは対局の存在として、企業が独自に設定するものという実績、思想が形成された。

・これはやがて高度経済成長期の企業スポーツの設立にも大きな影響した。

その他

各国の国際的なプロ・スポーツ(クリケット、テニス、ラグビー、ゴルフ他)と同時に土着的なプロ・スポーツ(スカッシュ、自転車、バドミントン、卓球、バレーボール、スノーボード、スキー、サーフィング他)のプロ化の歴史も異なるが、大勢は高度経済成長以降の成立である。

(しかし、多くの種目、多くの選手はプロ賞金、給料だけでは食べて行けず、兼業を強いられているのが実態である。プロ化を見る場合、「大衆の状況」(する、見る)、「選手のプロ化」、「企業」、「自治体」、「メディア(新聞、ラジオ、テレビ)」の関連で分析する必要がある。)

日本：相撲、野球

- プロ野球はなぜ企業中心で誕生し発展したか -

紙数の都合で、以下、項目のみを記す。

第3章 プロ・スポーツの誕生(ii)高度経済成長期以降

1. 福祉国家・高度経済成長とスポーツの発展 - アマチュアリズムの崩壊：2つの排除の崩壊
2. プロ化の促進
3. 大衆化：スポーツ・フォー・オール政策の普及
4. 日本の企業スポーツの誕生 - 日本スポーツの後進性、特殊性

第4章 プロ・スポーツの誕生(iii)90年代の国際化

1. 新自由主義と公共スポーツ政策(大衆スポーツをめぐる状況)
2. アマチュアリズムの消失

3. 高度化(プロ、プロ化)をめぐる状況

4. 日本の企業スポーツの現状と問題点

第5章 プロ・スポーツの経営形態

1. 3局構造におけるプロ・スポーツの生産者：プレーヤー・オーナー・リーグ
2. 球団(クラブ)
3. 中国のプロサッカー

第6章 日本のプロ・スポーツ - プロ野球とJリーグ -

1. プロ野球：文化としての導入はアメリカだが、リーグ運営はイギリス型
2. Jリーグ、Jクラブ：文化としてはイギリス型だが、リーグ運営はアメリカ型
4. 日本のプロ野球とアマチュア野球をめぐる過去の経過

第7章 プロプレーヤーの権利

1. プロプレーヤー = スポーツ生産者(労働者)
2. プレーヤーの労働条件(健康保険、年金)
3. プロプレーヤーの年俸
4. プロプレーヤーの現役年数

第8章 プロ・スポーツと地域振興

1. 自治体とプロ・スポーツ振興：4(5)つの政策目標
2. アメリカ・メジャーリーグ
3. イギリス
4. 日本

第9章 「観るスポーツ」と「するスポーツ」

1. 日本におけるスポーツマスコミ
2. 入場者数の動向
3. 日本の自治体における野球とサッカーの差

第10章 観客・サポーター・視聴者(消費者)

の権利

第11章 スポーツ産業

1. スポーツ関連労働と雇用
2. スポーツ用品
3. スポーツイベント
4. スポーツ情報

第12章 理論上の諸問題 - プロ・スポーツと

公共性 -

終章 プロ・スポーツの課題